

朱夏

上

宮尾登美子

朱夏

四

宮尾登美子

工业学院图书馆
藏书章

朱 夏 (上)

一九八五年六月二五日 第一刷発行
一九八五年八月一〇日 第三刷発行

定 価 九八〇円

著 者 宮尾登美子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

〒 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

出版部 (〇三) 一三八—二八四二
販売部 (〇三) 一三〇—六一七一
製作課 (〇三) 一三八—二九六四

電話

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛
にお送りください。送料は小社負担でお取り替え
いたします。

©1985 T. MIYAO, Printed in Japan

ISBN4-08-772528-6 C0093

朱夏(上) 目次

第一章 出 発 五

第二章 飲馬河 八

第三章 逃走―宮城子(一) 二五

装帧 田村義也

朱^{しゆ}

夏^か

(上)



第一章 出 発

その朝、門の前の川に枝をさしのべている満開の実桜の葩はなびらが、こまかくふるえ続けていたのを、かつきりと綾子は目に灼きつけている。春の朝の空晴れわたり、一ひらの雲も見えない午前七時、戦闘帽に背広、ゲートル姿にリュックを背負った要と、もんぺにセーターと背広、その上に生後五十日目の美耶をおぶった綾子は並んで母家の前の坪庭に立った。

朝日が斜めにさし込んでゐる家の縁側には、多分そこひを病んだせいだと思えるほとんど目の見えない八十二歳の要の祖父道太郎が見送りに出て来ており、

「そんなら、お祖父さん」

と要が別れの挨拶をすると、道太郎は二つに折れた背を伸ばして首をあげ、
「気をつけてのう。なるべく早う戻ってやれや」

といつもながら義齒の具合の悪そうな、はつきりしない声で言った。

綾子も、黄いろい巻蒲団にくるまれた背中の美耶を道太郎の顔に近づけて揺りあげ、

「ひじいちゃんも元気だね。そんなら行て来ます」

というと、道太郎は深く皺を彫り込んだ大きな手をのばしてねんねこ絆纏ばんだんの黒衿くろえりに触り、

「早う戻つてやれや、のう」

ともう一度繰返した。

その短い言葉のなかに、年寄りのせつない思いが張り裂けそうに込められているのを十八歳の綾子は読み取ることができず、弾んだ明るい声で、門まで送ろうとして杖を捜している道太郎を押しとどめてから縁側を離れた。門を出るとき振返り、藁わらぶきの母家、左手の納屋と雪隠せうえん、門のわきの倉、紅葉の植込みと家のまわりの背の高い木々、とひとつひとつ目にとどめ、それから川辺に近寄つて行つて苺いちじの多い実桜の小さな一枝を折り、背中の赤ん坊の前でくると廻しながら歩き出した。農事の忙しくなる春の朝の七時は、もう村中野良に出ており、どの家も森閑として往還には人影も見当らぬ。水量豊かな用水沿いのこの道は、家の生垣の端に植えてある肉桂にっけいの木を取巻くように大きくカーブして、白く長く西へと伸びており、村はずれから北へ折れて仁淀川によどがわの堤をさかのぼつて伊野の町へ入っている。

今朝、この家で最後の朝食だというのに、姑しゅうとめのいちはそのくさと一番先に済ませ、卓袱台ちやくぶだいのそばに寝かせてある美耶を抱きあげてろつろつ、と舌を鳴らせて暫くあやしてから、

「そんならね。私は送らんきにね」

というなり、いつものように畠に出るべく手拭いを被り、釜屋かまやの腰高障子を開けて出て行つた。

その姿は如何にも何気なく、あら、と綾子が目を上げると、障子の引手の横の小さな破れから、納屋の前で鋏はさみを取り下ろしたあとと鼻をかんでいる姑の姿が見えた。長の別れともみえぬ呆気ない

その態度に綾子が、

「お母さん、どうして？」

と要に問うと、要はこともなげに、

「忙しいのやろ。もう苗床も作らんならんし、麦に土も掛けんならんし」

と答えたが、綾子はそれを聞いてああそうか、畠が忙しいのか、と農事のことはよく判らないままに納得した。

祖父が別れの挨拶に、「早う戻れよ」とはいわず、「早う戻ってやれや」と二度も繰返したのはこの姑の胸のうちを指しての言葉だと綾子に判ったのはずっとこのことで、このとき、鼻をかむふりをして姑が泣いていたことさえ綾子には判らなかつた。判っていたとしてもいまの綾子には、一人息子と初嫁、生れたばかりの初孫を遠い大陸へ旅立たせる悲痛な姑の思いよりも、無事に出産を了え、待ちわびていた夫の迎えを受けて今日とどこおりなく出発できる喜びのほうがはるかに大きく、今朝目ざめたとき障子が朝日で朱に染まっているのを見、思わず、

「わあーっ、すごくいいお天気」

とはしゃいだりしたが、そういう嫁の姿をいちはどうな思いで見ていただろうか。

陽はうらうらと照ってはいても風はまだ冷たく、その風に逆らって伊野往還を歩きながら、綾子は心のうちでこの道を歩くのはちようど一年目、だと思った。

今日は昭和二十年三月三十日で、一年前の昨日は小学教師である夫の任地山間部の古川村で結婚式を挙げ、そして翌日、両家の一統はこの道を今日とは逆に夫の家へと帰って来たのであった。ここは高知市を去ること二四キロ、土佐のデンマークともいわれる肥沃な吾南平野のいちばん端、

吾川郡桑島村で、村中がほとんど富裕な農家だが、道太郎、友義、と二代続いた石工の三好家もわずかながら耕地がある。姑のいちは、二十六歳のとき夫の友義を肺結核で失い、以後九歳の佐代、六歳の要、三歳の尚と舅姑を抱え、こんにちまで一人で田地を守り続けて来た人である。いちがこの家で過した今日までの年月のあいだには、夫について姑を送り、娘の佐代を嫁がせたあと、次男の尚を夫と同じ病いで失うという悲しい出来ごとがあった。それも女手ひとつで農業学校を卒業させ、教師勤めで家に居つかぬ長男に代って農事一切を引受けてもらえると安堵した矢先に倒れ、まる二年あまりの患いののち二十一歳の短い生涯を了えたのは昭和十八年の四月であつた。

いちにとつてはこの三年、春は悲喜交々こもどもに到る季節であつて、尚の死のあと、翌春には要が嫁をもらい、すぐに初孫が生れたと思えば今年春は三人揃つて満州へと旅立つことになり、家はまたもとどおり、老いた舅の道太郎といちとの二人だけになつてしまふ。隣とはいつても東の家はみかん畑をへだてた向う、西も藁ぐろをいくつも積んである畑の先ともあれば、朝な夕なまことに淋しく、毎日野良へ一人で出るいちの留守は、道太郎もまたたつた一人で日向ぼっこをして心細いときを過ぎねばならぬ。

去年この家で披露の客をしたとき、戦争末期のこととて物資は正規の手続きではもう特配の少量の酒ぐらいしかなかったが、いちの熱心な奔走で皿鉢まはちを充たすだけの食糧はととのい、客に恥をかかずに済んだのだとこれはあとで綾子は姑の口から聞いた。今度の満州行きについて、さかのぼればこの結婚式のとき、いやさらに以前、二人の結婚約束ができたときまで根が拵がついてるように漠然と感じられるのは、綾子の実家の稼業が芸妓娼妓紹介業という、およそこの辺りの

農家とは全く縁のない、恥ずべき職業のせいではないかと綾子の考えざるを得ないところがある。女学校時代から友人たちにも家業をひた隠して来た綾子には、いつもやみ難く富田家から離れたい念願があつて、そのため東京進学を強く望んだが、空襲のさなか、体の丈夫でない一人娘を父の岩伍が手離すのをがえんじなかつたことと、それに中野正剛の東方同志会に入つて頑冥な国粹主義を奉じ、女に学問は要らんとつねづねいい続けていたこと、さらに言えば、親の目から見ても生意氣な綾子に高等教育でも受けさせれば手のつけられぬ女になつてしまひはせぬか、という危惧のために、綾子の希望はついに実現を見なかつた。

卒業は綾子にとつて暗い春で、北向きの二階の寒い自室に閉じこもり、さきゆきの望みもないまま毎日机に凭りかかつてぼんやりすごしていたとき、継母のひろの仲立ちで本科に附属した家政研究科へ行くことになり、これはひろへの義理だけと割り切つて花嫁学級、とかねて輕蔑していたこの科に綾子は通うようになった。十七歳のこの頃の日々は本意に充たぬ苛立ちばかり、親兄弟や知人とは全く関わりのない未知の土地へ飛び立つてゆきたい思いに驅られ、いく度か家出の幻想に捉われてもときは空襲下、県内旅行でさえままならず、綾子はこういうとき、シエバードのドリーを連れてよく鏡川べりに散歩に出掛けるのであつた。

家の職業への嫌悪感とそれを平然と続けている父岩伍への侮蔑、こういう汚濁のなかにいると自分も泥まみれになる、という苛立ちは綾子を揺さぶつてやまず、ある日、父には無断で代用教員志望の旨を県視学あてに郵送した。昭和十八年の秋といえは男子教員はほとんど戦争に驅り立てられ、留守を守る女教師の数も足りず、産休のあとの助教の用命はすぐさまあつて、綾子は生れてはじめて生家を離れることになった。これを合法的家出と綾子は考えているが、退学届を出

した学校からは慰留され、父親は憤怒の形相隠そうともせず、そのなかで綾子一人心は軽く、生来あまりものにこだわらぬ性格もあって、父が渡さぬという米穀の移動通帳も持たないまま、県境の山の小学校へと赴任してゆくのである。

要とはこの学校で出会ったが、二人だけで話したのはある雨の午後的一次、三十分ほどしかなく、そのうち、綾子の下宿先の郵便局長を通じて要から結婚を申し込まれたとき、迷わず綾子はこの話を受けようと思った。というのも、家を離れば父親と縁が切れる、と考えていたのはまことに世間知らずの解釈であって、山村といえども近くの町に料理屋もあれば、その料理屋は岩伍の取引先でもあり、そういう手から水も洩れるし、またそうでなくてさえ、町生れ町育ちの綾子は何かにつけて草深い地では目立つのであった。

衣料はとうに切符制になってはいたが、綾子の着ているオーバーは、父のフラノを仕立て直した純毛品であり、スフ入りの紺の上っ張りを着た女教師ばかりのなかで、綾子の背広の上下は母のセルを男仕立てにした明るいグレイで、女教師たちはいく分の羨望を混えて綾子のことを「春のひと」などと呼んだりする。それに助教の給料では金勘定のできぬ綾子の暮しはとうていまかない切れず、週末には必ず富田の家へ戻り、父親から給料のいく倍もの小づかいをもらうという辻褄つぎはみの合あわぬことをやっているのも、やはりなお親の庇護のもとにあるという強い感じからはまぬがれなかった。

助教赴任が家出行為とは思っても、綾子が富田家の一員でいる限り、親の職業はどこまでもついて廻る。そう考えれば家と縁を切るのほうはもう結婚より他にはなく、それも嫌いな相手なら承諾はできないが、三好先生は好もしくやさしそうで、この人となら手をつないで父の威光の圏外に

逃げおおせられそうであった。

仲人馴れした郵便局長は綾子の了解をとりつけると、木炭バスに乗って高知市へ赴き、岩伍との交渉に入ったが、その留守、綾子は教壇に立っていてもときどき爪先から心細さが震えとなつて這い上つて来たのをいまでもよく憶えている。それは、突然の結婚話に両親がびっくりするであらうというようなことではなく、局長に生家の職は回漕業、と嘘をついていたことが見事にバレるおそろしきであつた。四十年前、岩伍が掲げた看板はいまも風雨に耐えて家の門に掲げられてあり、それをこの局長が見たとき、結婚話どころか綾子に関わることをさえ恐れて以後絶交されはしないかと怯えるばかりであつた。

が、帰つて来た局長は、綾子の家の職業には全く触れず、

「先生よ、この話はなかなかまとまり難いよ。第一三好先生とは釣り合はん」

とだけの報告で、なおしかし、心強いことに、

「かういふときは富田先生、あんたの意志が固いかどうかで體も動きようがある」

と綾子の意志を確かめてのち、ほんなら一切任してもらおう、と胸を叩いてくれた。

綾子は、局長が自分に嘘をついていた罪を責めないばかりか、家業に対して格別嫌悪感も持っていない様子を見て胸を撫でおろすとともに、相手の三好先生もこの事実によって結婚の意志を変えていないことを知り、大きな安堵を持った。男たちは綾子のいないところでさまざま家業と岩伍について語り合つたに違いないが、それを一言も綾子には伝えないし、そればかりかときどき、

「お父さんはなかなか義理固い立派な方で」

とか、

「よくものの判った方で」

とか、夕飯のときなど局長が話題にするのを聞いて消え入りたいほどの思いを抱くのであった。この結婚話がこわれるのは嫌、と綾子が思うのは、今後もし事成らず、二度三度こんな場面に
出くわせば、その都度家業を知られる人の数が増えてゆくわけであって、それはひた隠しにして
いる罪業を世間に対して次第に公表してゆく行為だと綾子は考えている。結婚が家からの逃避と
してもはや唯一の行動とは判っても、ついては少なくとも相手方と仲人夫婦にこの秘密が知れわ
たるのを思えば、こういう話がこのあと重ねてあるというのは綾子はこれ以上はもう耐えられ
ないことだと思つた。

局長のいう釣り合はぬ、は、三好先生の家が家系正しくもの堅い農家であるのに対し、綾子の
家は万端はるかに劣つてしがない町暮しなのを指すとばかり思つていたが、その週末に帰つた家
で、両親と兄たちの口にする言葉は全く別の見かたであつた。

綾子とは十八ちがいすでに四人の子持ちである兄の健太郎は、向うが母一人子一人の零細農家
で、本人にさして学歴もなし、お前が嫁げば生涯にわたつて貧乏することは目に見えている、断
固やめなさいと強意見、継母で人のいいひろは珍しくはつきりと、いくら戦時中だとはいえ十七
で嫁にゆかせるのはあたしが追い出したように世間に取られる、綾ちゃんはまだ稽古事も充分で
なし、もう五、六年は家にいて欲しいとかき口説き、父親は二人に較べては冷静な言葉だったが、
「たてよこどう検討してもこの縁談は受けつけることはできん。局長さんにもそう伝えてある。
考える余地はない」

と最もきつい引導の渡しようであった。

綾子は三人を順々に見渡し、このひとたちは昔から自分のすることに対し、悉く反抗的だとか生意気だとか無鉄砲だとかいい続けて来、東京進学の希望さえ打ちくだいたが、今度ばかりは是が非でも我意を通さずにおかぬと思った。

「お父さん、お母さん、お兄さん、私はどんなに反対されてもこの結婚は自分の思い通りにします。親兄弟の縁を切ってももうてもかまいません」

という兄は頭から、

「このバカが」

と怒鳴りつけたが、岩伍はそういう綾子の強さに少したじろいだようであった。

このあとほどなく岩伍は、とにかく三好先生に会ってみよう、と軟化した態度になり、休日非要を家へ招き、また綾子も桑島村へ出向いていちに会ってのち、局長の努力も結んでようやく結婚式の段取りとなったのであった。綾子は、富田の家は代々商家で、月給取りはふさわぬ、といひ続けていた父が急に折れた理由について、それは要が好印象を与えたせいだと考えていたが、のちに周囲の雰囲気から推測して、単にそればかりではなく、岩伍が一人娘の初恋を成就させてやりたいという親心に負けてしまったのではなからうかと気づいたことがあった。

それは、嫁いでのちいちや親戚の面々が綾子夫婦を指して「好き合いの夫婦」、それも熱烈な好き合い、という意味合いを一種の蔑みとかすかな妬心を混ぜていい合っているのをいく度も耳にしたときからで、聞いたときは意外な気がし、これが好き合いというものか、と自分の胸のうちを覗く気持であった。あのとき綾子の本心は、恋や愛などとはほど遠く、家からの脱出の相手

として要が如何にもやさしく頼もしそうだと思ひ定めたのが大半で、その証拠に結婚とはどういうものか、将来我が身がどういう有様になるか、先のことなど夢にさえ描いたことがなかったのであった。

結婚式は古川村の黒住教会であげ、土地の料亭で披露宴を張ったが、これについて両家意見が相分れ、中に立つ局長は調整に苦労したといわれている。昭和十九年春といえbaum戦争も末期で、結婚式はもんぺと国民服、という翼賛会などの方針通りを踏まなければ非国民のそしりを受ける町の暮しの富田家と、時勢の波など大して関わりもない田舎の三好家では根本から考えかたが違い、諸事つましく簡略に、という富田家のいい分を、いちにすればむこうは母親が継母なるが故に、式や支度に金を惜しむのではあるまいかと疑ってかかるところがある。富田家ではこのせつ、町内隣組へ戦時国債の割当てでもあれば、どの家でも皆国家への赤心見せたさに争って買いたがるという町の繁華街に住んでいれば、娘の結婚に大げさな支度は極力さしひかえたく、それにすべての商売が売る品のないため半戸下ろしている有様では、針箱ひとつ整えることはできないのであった。

綾子の支度について岩伍は、いま綾子の持物としている衣類、蒲団、机、本棚その他の類は送り届けるが、新しい支度は何もせずできず、その代りとして、もし平常時ならば綾子に使ったであろう一千円の現金を包み、金銀の水引きをかけ上に持参金と書いていちに贈った。当時の一千円といえば小さな家なら一つ買えるほどの高だったが、いちに岩伍のその心根を理解することが出来ず、金よりも物、の時代にどれほど高額の金を贈られても役にはたため、といいこそしないものの、不満な面持ちを隠そうとせず、式のあと綾子に、